

望岳山荘



中嶋 嶺雄

本紙に連載されている「古川寿一の聞いた見たり」の博識には、敬服することが多い。去る八月二十六日付では松本市あがたの森の旧制高校記念館で開催中の「旧制高校とその時代展」について紹介され、こう書かれていた。

「松本としては辻新次、沢柳政太郎の資料を加えて欲しかった。両人は松本藩士の出身で、辻は東大の前身でもある洋書調所に学び、明治五年には大学南校(東大に編入される)の校

長に抜擢され、十九年の学制大改革の文部次官だった。沢柳は東京大学予備校から東大文学部卒(明治21)、後に二高、一高校長、牧野伸顕文相の下で文部次官などで活躍、東北帝大総長、退官後は帝国教育会長で重きを成した人物である。」確かにこの両人は松本市出身で明治期の教育界、特に文教行政に大きな足跡を残したのであるが、辻新次は私ともいささか関連があるので、若干の事柄を郷里の皆さんにお伝えしておきたい。

なる。松本藩士で東京外語との関連では、漢語科に学んだ川島浪速(川島芳子の養父)のことは比較的知られているが、辻新次のことにはほとんど知られていない。私自身、学長として大文学史の編纂に携わってから知ったのであった(なお神田大火、関東大震災、東京大空襲のために大学史をも

辻新次という人物

てなかった東京外国語大学は、平成十一年の独立百周年(建学百二十六年)記念に『東京外国語大学史』全一巻と資料編全三巻を刊行した。さて東京外国語学校が文部省の隣の神田一ツ橋通町に建学されたのは、明治六(一八七三)年十一月のごとで、文部省が現在毎日新聞社のある竹橋の地に誕生

した翌年であったが、それは安政四(一八五七)年に生徒一九一名をもって九段下に開校した蕃書調所(のちに洋書調所、開成所、開成学校、大学南校、南校、開成学校など)と変遷を外務省独善清語学所、独逸学教場とともに来源にして、開成学校の語学生徒を中心につくられたものであった。

の英語科には岡倉寛三(天心)、新渡戸稲造、内村鑑三、嘉納治五郎といった後に日本の近代を担う錚々たる知的リーダーたちが生徒として入ってきていた。当時の外国語学校の人気の高さについては、魯語学(ロシア語)外国教諭(お雇い外国人教師)のメーチニコフが著書「回想の明治維新」(渡辺雅司訳、岩波文庫、一九八七年)で詳しく記しているけれど、彼は近々の神田神保町にあった辻宅に下宿をしていたという。辻と外語の関係は短かったけれど、小村寿太郎、伊藤博文らの海外留学生派遣事業を起すきっかけになり、また明治期の教育制度大改革を担った森有禮文相の時代に文部次官として影の苦勞を一手に引き受けている。郷里の後輩澤柳政太郎が文部省図書課長のとき

に起こった教科書問題(教科書業者に修身教科書の検定方針が事前に漏れたとして大きな事件になった)で退官を余儀なくされたが、一時は「文部省の辻か、辻の文部省か」といわれたほどの力をもっていた。大日本教育会、その後身の帝国教育会の会長を長く務めたばかりか、晩年は男爵に叙せられて面目を回復した。古稀の祝いを固辞して松本藩主だった戸田家や辻の恩師らへの謝恩祭を築地精養軒で催したときには、澤柳が同郷人として、伊藤源氏(武田家)に由来する辻家の来歴にも触れている。

辻新次は大正四(一九一五)年に七十四歳で没し、戸田家と同じ東京の染井墓地に葬られた。(前東京外国語大学長川松本市出身)